

大阪大学

リサーチ・アドミニストレーター
(URA)

整備事業報告会 資料集

平成27年3月



開催にあたって

日本では近年、大学における研究推進体制の強化のため、支援職としてのリサーチ・アドミニストレーター(URA)を新たな職種として整備する動きが進んでいます。また、URAのような人材が、研究だけでなく、広く大学のマネジメント改革に必要ではないかという議論もなされています。

大阪大学では、URA という職が世の中に広く知られる前から、そのような研究支援職が必要であると考えていました。そして、6年近く前の平成21年7月に大型教育研究プロジェクト支援室を設置し、平成22年4月に統括マネージャーを採用してリサーチ・アドミニストレーション活動を開始しました。その後、講師1名とともに、大学として応募する大型プロジェクトの申請書作成や研究者等の競争的資金の応募支援等を自主経費で行ってきました。

平成24年6月には、文部科学省の「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」(リサーチ・アドミニストレーションシステムの整備)事業の実施機関に選ばれたことを受け、大型教育研究プロジェクト支援室内に URA チームを設置しました。そこに8名の URA を配置し、本部事務機構や部局・プロジェクト等でリサーチ・アドミニストレーション業務を担当している教職員との連携の下、大阪大学版 URA システムの整備を3年度計画で進めてきました。また、平成25年8月に文部科学省の「研究大学強化促進事業」の支援対象機関に選ばれたことにより、5名の URA を加えて、活動の充実に努めています。

大阪大学では、URA を任期の定めがない評価連動型年俸制で、裁量労働制が適用できる職として導入しました。また、大型教育研究プロジェクト支援室の統括マネージャーを副学長に指名すること等によって、URA の必要性を学内に周知するなど、総長の強力なリーダーシップの下、体制の整備がなされています。

本報告会では、東京会場においては、日本の URA 活動を牽引して来られた京都大学学術研究支援室の田中耕司室長に、大阪会場においては、URA 整備事業を担当して下さっている文部科学省科学技術・学術政策局産学連携・地域支援課大学技術移転推進室の山下 洋室長に基調講演をお願いしています。お二人の大所高所からのお考えとともに、URA 整備事業で任用されている8名の URA が活動報告をします。皆様のご参考になれば、幸いです。

なお、大阪大学は URA 整備事業の実施機関として2年間の継続が認められました。引き続き、日本における URA システムの確立が促進されるよう、先導的モデルとなるように努めてまいりますので、今後とも皆様のご支援をお願い申し上げます。

平成27年3月

大阪大学 基盤研究担当理事・副学長
大型教育研究プロジェクト支援室長
相 本 三 郎

目 次

大阪大学リサーチ・アドミニストレーター(URA)整備事業報告会 プログラム

東京会場(平成 27 年 3 月 24 日開催) プログラム	1
大阪会場(平成 27 年 3 月 26 日開催) プログラム	2

URA 整備事業成果報告

(1) 大阪大学 URA 整備事業の概要	3
(2) 研究戦略立案のための情報収集・解析	9
(3) 研究の国際展開に向けた取組	17
(4) 研究広報とアウトリーチ活動のための取組	23
(5) 学内異分野ネットワーク構築の取組	31
(6) 人文・社会科学系研究に関する取組	37
(7) URA のための URA による副読本について	47
(8) URA 職の定着に向けた取組	55

大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室の歩み	63
------------------------	----

大阪大学 リサーチ・アドミニストレーター（URA）整備事業報告会（東京開催） プログラム

開催日時： 平成 27 年 3 月 24 日（火） 13 時 20 分～17 時 10 分

開催場所： 虎ノ門ツインビルディング 西棟地下 1 階 会議室（東京都港区虎ノ門 2-10-1）

時間帯	講演・報告題目	講演者・報告者
12:30 ～	受付	
13:20 ～ 13:25	開会挨拶	副学長（URA 担当） 池田 雅夫
13:25 ～ 13:30	来賓挨拶	文部科学省 科学技術・学術政策局 産業連携・地域支援課 大学技術移転推進室長補佐 塚本 英則 氏
基調講演		
13:30 ～ 14:00	「URA に期待されること：越境あるいは跨境のすすめ」	京都大学 学術研究支援室長 田中 耕司 氏
URA 整備事業成果報告		
14:00 ～ 14:20	(1) 大阪大学 URA 整備事業の概要	URA 宮田 知幸
14:20 ～ 14:40	(2) 研究戦略立案のための情報収集・解析	シニア URA 菊田 隆
14:40 ～ 15:00	(3) 研究の国際展開に向けた取組	URA 望月 麻友美
15:00 ～ 15:15	休憩	
15:15 ～ 15:35	(4) 研究広報とアウトリーチ活動のための取組	シニア URA 岩崎 琢哉
15:35 ～ 16:05	(5) 学内異分野ネットワーク構築の取組 (6) 人文・社会科学系研究に関する取組	URA 福島 杏子
16:05 ～ 16:25	(7) URA のための URA による副読本について	URA 高尾 正敏
16:25 ～ 16:45	(8) URA 職の定着に向けた取組	URA・統括マネージャー 池田 雅夫
16:45 ～ 17:05	質疑応答	
17:05 ～ 17:10	閉会挨拶	副学長（URA 担当） 池田 雅夫

※ 閉会挨拶終了後、18 時まで個別の質疑応答の時間を設けております。

大阪大学 リサーチ・アドミニストレーター（URA）整備事業報告会（大阪開催） プログラム

開催日時： 平成 27 年 3 月 26 日（木） 13 時 20 分～17 時 20 分

開催場所： 千里ライフサイエンスセンター 5 階 山村雄一記念ライフホール
（大阪府豊中市千里東町 1-4-2）

時間帯	講演・報告題目	講演者・報告者
12:30 ～	受付	
13:20 ～ 13:30	開会挨拶	大阪大学 URA 整備事業 実施責任者 理事（基盤研究担当）・副学長 相本 三郎
基調講演		
13:30 ～ 14:00	「イノベーション創出を支える URA の 今後の展開」	文部科学省 科学技術・学術政策局 産業連携・地域支援課 大学技術移転推進室長 山下 洋 氏
URA 整備事業成果報告		
14:00 ～ 14:20	(1) 大阪大学 URA 整備事業の概要	URA 宮田 知幸
14:20 ～ 14:40	(2) 研究戦略立案のための情報収集・解析	シニア URA 菊田 隆
14:40 ～ 15:00	(3) 研究の国際展開に向けた取組	URA 望月 麻友美
15:00 ～ 15:15	休憩	
15:15 ～ 15:35	(4) 研究広報とアウトリーチ活動のための 取組	シニア URA 岩崎 琢哉
15:35 ～ 15:55	(5) 学内異分野ネットワーク構築の取組	URA 福島 杏子
15:55 ～ 16:15	(6) 人文・社会科学系研究に関する取組	URA 川人 よし恵
16:15 ～ 16:35	(7) URA のための URA による副読本に ついて	URA 高尾 正敏
16:35 ～ 16:55	(8) URA 職の定着に向けた取組	URA・統括マネージャー 池田 雅夫
16:55 ～ 17:15	質疑応答	
17:15 ～ 17:20	閉会挨拶	副学長（URA 担当） 池田 雅夫

※ 閉会挨拶終了後、18 時まで個別の質疑応答の時間を設けております。

URA 整備事業成果報告(1)

大阪大学 URA 整備事業の概要

URA 宮田 知幸

大阪大学URA整備事業の概要

URA 宮田 知幸

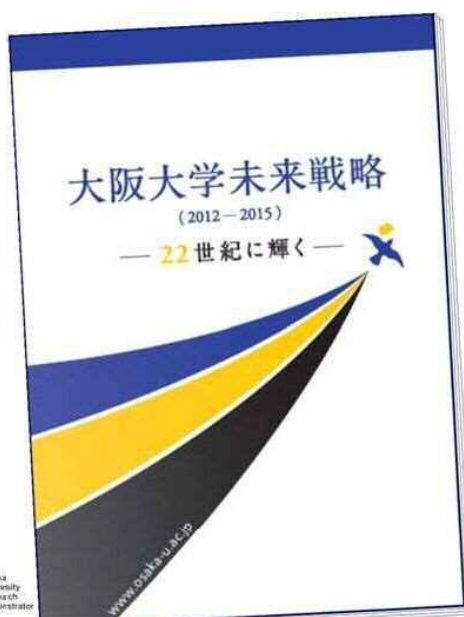


概要：大阪大学の基本方針

世界的な研究型総合大学「世界適塾」

「物事の本質を見究め、世界に羽ばたく」

世界トップ10を目指す



大阪大学未来戦略機構の創設

◆ 戦略企画室の設置

- 大学の有する教育・研究資源を的確に把握し、戦略的大学の経営に資する様々なデータの収集、調査、分析、提供、提言を効率的・効果的に行う

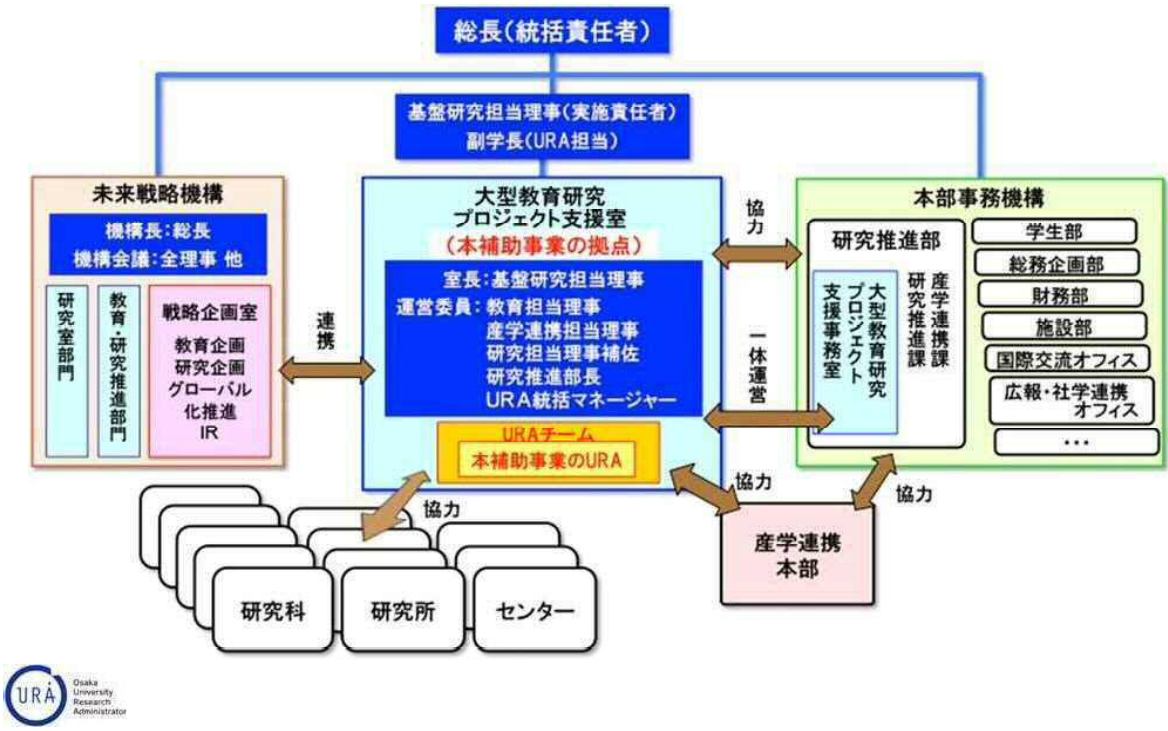
IR(機関研究)チームを組織

本質を究め未来を創造する研究

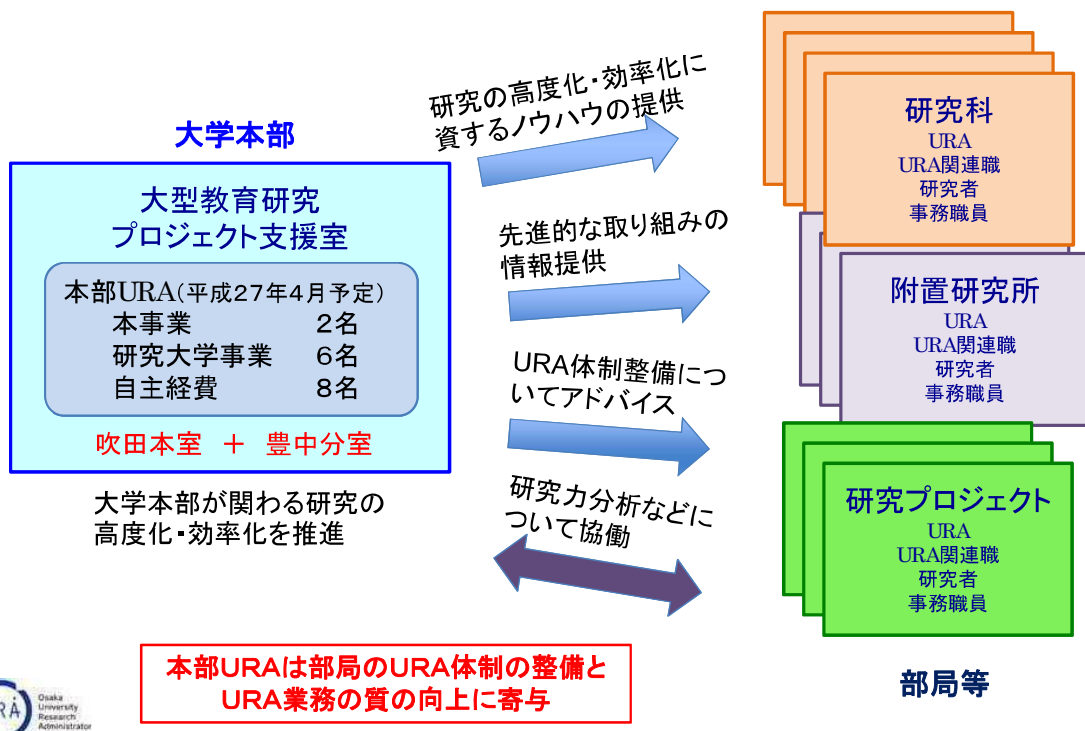
◆ 大阪大学の最先端研究に対する支援

- リサーチ・アドミニストレーターを充実させ、最先端研究プロジェクト推進のための大型資金の獲得や研究環境の整備等を支援

URAが配置されている組織の位置付け



本部URAと部局URAの関係



URA職の定着に向けた取り組み

1. URA活動の学内外への周知と啓発	<ul style="list-style-type: none"> ◆大阪大学URAシンポジウム(2013年8月)、URA整備事業報告会(2015年3月)の開催 ◆メールマガジンの発刊(2013年10月より毎月1回) ◆活動内容と経験知の他機関への紹介(講演、副読本) ◆他大学URAインターンの受入 ◆RA研究会、URAシンポジウム企画への参加 <ul style="list-style-type: none"> ・第3回URAシンポジウムの開催担当
2. URAの研修・教育プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ◆URA整備事業の研修・教育プログラム作成に協力 ◆学内URAの研修・セミナー等の実施
3. URAの職種の検討	<ul style="list-style-type: none"> ◆URAキャリアパスの検討 ◆第3の職種として制定へ
4. URA個人評価の試行	<ul style="list-style-type: none"> ◆年間業務目標の設定、自己評価、面談による評価システム



実施しているURA業務

1. 研究戦略立案のための情報収集と解析	<ul style="list-style-type: none"> ◆研究の強みの発見、研究戦略の企画支援 ◆人文・社会系支援に関する国内外の調査
2. 全学的プロジェクトに対する支援	<ul style="list-style-type: none"> ◆体制作り、申請書作成、ヒアリング準備、採択後の立上げ等 <ul style="list-style-type: none"> ・博士課程教育リーディングプログラム ・研究大学強化促進事業
3. 研究プロジェクト等に対する支援	<ul style="list-style-type: none"> ◆競争的資金公募情報の収集、学内への周知 ◆大型科研費、CREST、さきがけ、ALCA、学振特別研究員等の応募支援 <ul style="list-style-type: none"> ・応募書類の内容チェックとアドバイス ・模擬ヒアリング、模擬面接
4. 国際対応のURA業務	<ul style="list-style-type: none"> ◆国際共同シンポジウムの開催支援 ◆国際共同研究の企画支援 ◆外国人研究者への英語による情報提供
5. リサーチ・アドミニストレーションの全学展開	<ul style="list-style-type: none"> ◆部局配置のURA(類似職)との情報交換 ◆セミナー等によるFD、SD活動 ◆アウトリーチ活動の普及のための指導



URAチーム:多彩、多才なメンバー

大阪大学 URA 大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 URAチーム メンバー紹介

池田 雅夫 (池田 雅夫 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

高尾 正敏 (高尾 正敏 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

富田 知幸 (富田 知幸 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

前田 隆 (前田 隆 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

平井 啓 (平井 啓 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

岩崎 琢哉 (岩崎 琢哉 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

望月 麻友美 (望月 麻友美 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

川人 よし恵 (川人 よし恵 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

福島 西子 (福島 西子 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

大塚 知子 (大塚 知子 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

伊藤 京子 (伊藤 京子 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

Kristian Bering (Kristian Bering 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

藤 直樹 (藤 直樹 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

橘 馨 (橘 馨 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

花岡 宏亮 (花岡 宏亮 氏) 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授
 工学部 工学系 工学教育科 工学教育学 准教授

私たちは、研究活動の更なる充実を、
 教職員の皆様と一緒に考えます。

大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室URAチームへの
 お問い合わせやご相談はこちらまで。

URARA 豊中分室
 〒595-8505 大阪府豊中市豊中5-1-1
 TEL: 06-6643-1111
 FAX: 06-6643-1111
 E-MAIL: ura@ura.osaka-u.ac.jp
 info-ura@urara.osaka-u.ac.jp

大阪大学URA体制の概要

- 本部にURAを配置する
- 部局には、部局の裁量でニーズに合ったURA(関連職を含む)を置く
- 本部は部局URA体制の整備に貢献する
- 本部と部局のURAは情報交換を行い、必要に応じて協力し合う
- アドミニストレーション業務はチームが行う
- 複数のURAが複数の業務を担当する



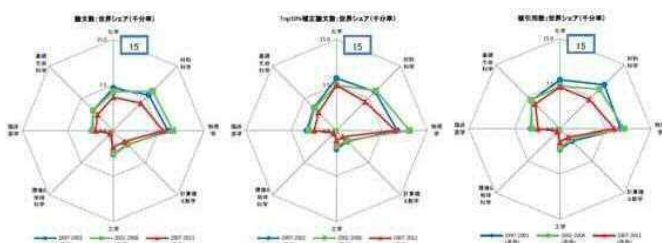
URA 整備事業成果報告(2)

研究戦略立案のための 情報収集・解析

シニア URA 菊田 隆

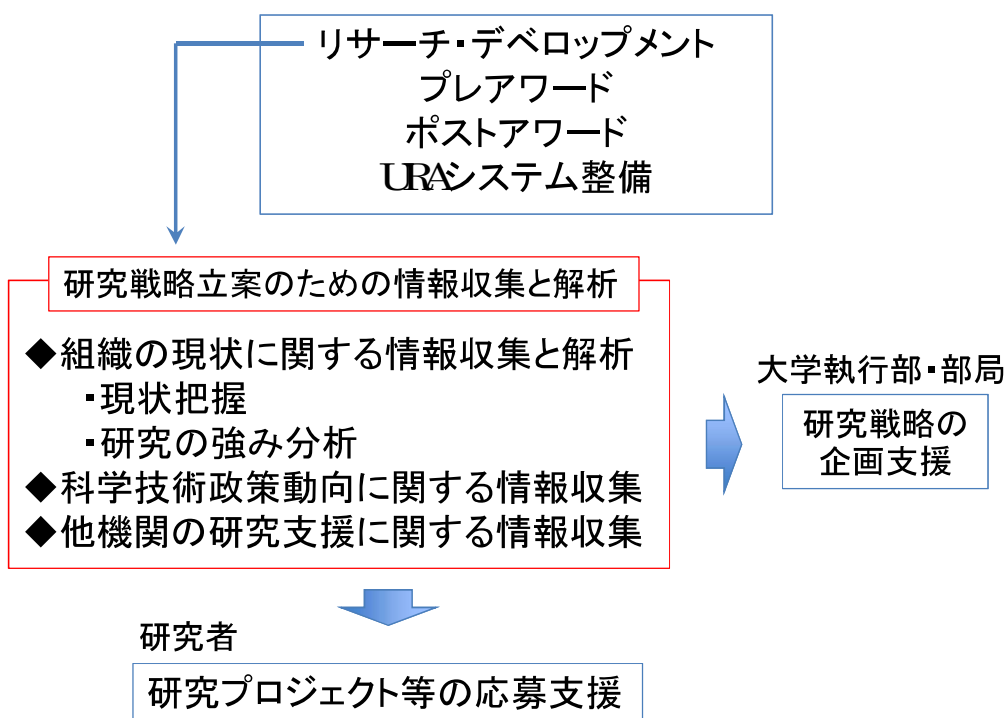
研究戦略立案のための情報収集・解析

シニアURA 菊田 隆



文部科学省科学技術・学術政策研究所
「研究論文に着目した日本の大学ベンチ
マーキング2011」(2012年8月)より

URAチームの活動



参考:リサーチ・アドミニストレーターの育成・確保

研究者とともに研究活動の**企画・マネジメント等**を行い、将来的には大学、公的研究機関等の**管理・運営等**を担っていく高度専門人材であるリサーチ・アドミニストレーターの育成・確保に当たっては、大学や公的研究機関等における社会的地位の確立と、適切な評価の下での明確なキャリアパスの確立、業務内容に応じた育成プログラムの充実等が求められる。

文部科学省科学技術・学術審議会総合政策特別委員会「我が国の中長期を展望した科学技術イノベーション政策について～ポスト第4期科学技術基本計画に向けて～(中間取りまとめ)」(2015.01.20)



2

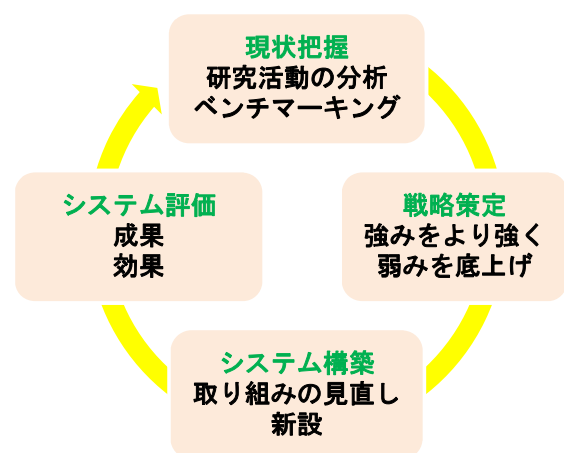
組織の現状に関する情報収集と解析①

■何のために情報収集するのか?

→ 現状を把握して、組織の研究力強化に向けた戦略・対策を検討するための**データを提供**するため

■どのように分析するのか?

→ **ベンチマーキング**による強み(弱み)分析
→ **時系列**データによる傾向分析



3

組織の現状に関する情報収集と解析②

■主な情報収集

▪統計データ

- 科学研究費補助金配分結果(文部科学省・日本学術振興会)
- 競争的資金配分結果(各省庁)
- 公的統計(科学技術研究調査、学校基本調査など)
- 各研究機関の年報・要覧など

▪データベース

- 学内データベース
- 商用データベース
- KAKENDEX(国立情報学研究所)
- 特許情報DB(特許電子図書館)
- 大学ポートレート(大学評価・学位授与機構)

▪大学ランキング

- Times Higher Education World University Rankings
- QS World University Rankings
- Academic Ranking of World Universities (ARWU)

▪独自調査

- アンケート調査(定量)
- インタビュー調査(定性)



4

組織の現状に関する情報収集と解析③

■分析指標の可能性検討

▪Altmetrics

論文やデータセットなど様々な研究成果物の影響を、ソーシャルメディアの反応を中心に定量的に測定する手法と、その手法を用いて新しい研究の影響度を測定する活動を指す。

文部科学省科学技術・学術研究所 科学技術動向2013年3・4月号

▪Science Linkage

製品やサービスに利用される技術(産業技術)がどの程度、科学(サイエンス)に依拠しているかを示す指標。通常、一つの特許が引用する論文の数で測られることが多い。

東京大学政策ビジョン研究センター

http://pari.u-tokyo.ac.jp/unit/words/words_s/s_1.html



5

科学技術政策動向に関する情報収集と解析

- 文部科学省等の審議会ウォッチング
 - 定期的なWEB巡回とトピックのレポート
 - 傍聴と記録の作成
- 政府予算
 - 概算要求
 - 予算案
- 公募説明会への参加
- ファunding・エージェンシー

他機関の研究支援に関する情報収集と解析

- 国内外の調査
- 対象
 - 大学、公的研究機関、研究費配分機関など
 - 各種セミナー・学会
- テーマ
 - URAシステム
 - 研究評価
 - 研究推進体制
 - 学術誌データベース
 - 人文・社会科学系の研究支援

研究戦略の企画支援①

■ 執行部

- 組織の現状・分析結果のレポート
- 審議会等傍聴記録作成 & 会議資料回覧
- 大型補助金への申請支援
- 新規プロジェクトの企画支援



《効果》

URAチーム発足により、上記情報の流通が円滑に行われるようになったと考える

研究戦略の企画支援②

■ 部局

- ED・SD講演会の実施とフォローアップ
- セミナー・WSの実施(勉強会、新任研修等)



《効果》

- 国立大学を取りまく政策の動向や本学の現状に関する情報に接する機会が少ないと思われ、有効な情報提供ができたと考える
- IRに関するWS後に分析ツール利用希望が増加
→各部局における分析力の強化に貢献した

研究プロジェクト等に対する支援

- 大型科研費、CREST、さきがけ等の応募支援
 - 応募書類の内容チェックとアドバイス
 - 模擬ヒアリング
- 日本学術振興会特別研究員の応募支援
 - 特別研究員説明会の講師
 - 申請書作成支援（作成ワークショップ、書き方セミナー、提出前相談）
 - 模擬面接



《効果》

特別研究員では何らかの支援を受けた者の採択率は、支援を受けなかった者より高い



10

今後の課題

■ 情報提供の高度化

執行部のニーズを先取りした情報提供と戦略オプションの提示（URAは情報提供を行うのみで、評価や戦略策定は執行部が行う）

■ 新たな指標開発

教育研究活動全体の状況を適切に把握するために多角的な指標開発を行い、書誌情報だけに頼ることのない調査・分析体制を整備

■ 学内URAネットワークの構築

IR分析を通じて構築されつつあるリサーチ・アドミニストレーション・ネットワークのさらなる充実

■ データベースの整備

学内の各種データベースを共同利用できる仕組みの構築



11

URA 整備事業成果報告(3)

研究の国際展開に向けた取組

URA 望月 麻友美

研究の国際展開に向けた取組

URA 望月 麻友美



国際対応のURA活動

外国アカデミアとの共同研究の促進を目指したURA活動

大阪大学と、本学研究者の研究の国際展開を目指して

1. 学内の基盤整備
2. 研究者支援

学内の外国人研究者にむけたURA活動

外国人研究者が研究を遂行しやすい大阪大学を目指して

3. 外国人研究者支援

1 学内の基盤整備

① 研究推進人材等の国際対応向上を目指した取り組み

研究の更なる国際展開を支える基盤整備

1. 事務系職員の海外研修 試行を含め計3回(欧州、豪州) メールマガジン Vol.3
若手事務職員による主体的な海外調査

2. 学内の研究推進人材等との合同海外調査 計4回(北米、欧州、アジア)

あるテーマについて学内関係者と海外調査

- ・オランダにおける人文・社会科学系の評価指標、大学の研究支援業務
- ・香港の研究大学における大学運営体制と研究支援体制 等

3. 研究推進人材のための海外助成に関する勉強会開催及び
学内支援対応の整備

欧州連合 Horizon2020プログラムに関して外部講師を招いた勉強会と意見交換

効果

事務系職員をはじめとした研究推進人材の国際対応への主体的な
関わりのきっかけ、ネットワーク作り



2

1 学内の基盤整備

② 研究推進人材等のスキルアップ

海外のURA活動を参考にしたり、研修プログラムを受講し、
大阪大学の研究推進人材等のスキルアップを図った

平成24年度

1. サイエンス・マネジメントについての研修

「サイエスマネジメントの重要性」(IRIS科学・技術経営研究所)

平成26年度

2. デンマーク オーフス大学 Research Support セミナー (3日間) メールマガジン Vol.19
～組織の中でURAを活用するには? URAとしてステップアップするには?～

3. グラントライティング ワークショップ (2日間) メールマガジン Vol.18予定

申請書編集の方法論やロジックモデル等の Proposal Development について学ぶ
(SRA International)

効果

- ・誰もが客観的に見ることができる事例を基に、自分たちを振り返ることで、業務の改善、新たな業務開拓、スキルアップと意識の向上につなげることができた
- ・学内研究推進人材のネットワーク作り



3

1 学内の基盤整備

③ 研究の国際展開のきっかけ、機会作り

世界トップ10に向けた支援策 より

学内助成プログラム名	内容	メールマガジン
国際合同会議助成	海外の研究機関と大阪大学の研究者による国際合同会議(シンポジウム)を支援	Vol. 3、5、13
研究成果の国際的発信支援プログラム	外部業者とURAによる個々の研究者に適した学術英文校正等の支援	Vol. 7
国際共同研究促進プログラム	最先端の研究を展開している外国人研究者と大阪大学の研究者との共同研究を支援、学内にジョイントラボを形成	Vol. 15
未来知創造プログラム	異なる研究分野の若手研究者の連携による共同研究に対する助成	Vol. 10、15
クロス・アポイントメント制度	本学と別の機関の双方に身分を有し、双方で業務を行う制度	

国際共同研究のきっかけとなる学内助成の企画、とりまとめ及び運営支援、研究者への聞き取りなどによるフォローアップ

効果 研究者の状況やキャリアに合わせた学内助成の整備により、国際共同研究や研究者の行き来が活発になった



4

2 研究者支援

国際展開を狙う研究者への支援例

1. 国際シンポジウム企画支援 メールマガジン Vol. 5

大阪大学と相手校の間に複数のコネクションや活動が生まれるように、様々なキャリアの研究者にとって、今後につながるような複数の企画の実施

効果 シンポジウム後の“何か”が確実に生まれつつある
このような“何か”が複数のネットワークで始まることにより、国際連携、機関同士の持続的な研究協力関係の形成にもつながっていく

2. 海外助成関連の申請書作成支援

欧州のHorizon2020
国際共同研究事業 等
の申請にあたり、学内の研究者と相手機関との調整を含む申請書作成支援

効果 URAが研究者と共に助成制度・応募要領の確認や申請書のブラッシュアップ、相手機関との調整を行うことで研究者が国際共同研究に対する助成に挑戦しやすい環境に



5

3 外国人研究者支援

外国人研究者に向けた支援

研究者本人の状況：
 そもその部分からの知識が不足している
 (日本の助成システム、研究者自身の雇用
 状況の把握 等)



研究者周辺の状況：
 英語による情報の少なさ
 周りの支援者の支援の偏り 等

1. 科研費英語申請サポートコンテンツ メールマガジン Vol. 1, 12

- Useful Information on the Grants-in-Aid-KAKENHI FY2015
 外国人研究者及びその支援者向けの科研費英語申請のためのコンテンツ
 どこよりもはやい公募要領英語版 等
- 外国人研究者向け科研費説明会

2. 申請書作成支援の英語対応

- JST 戦略的創造研究推進事業 さきがけ
- 日本学術振興会特別研究員

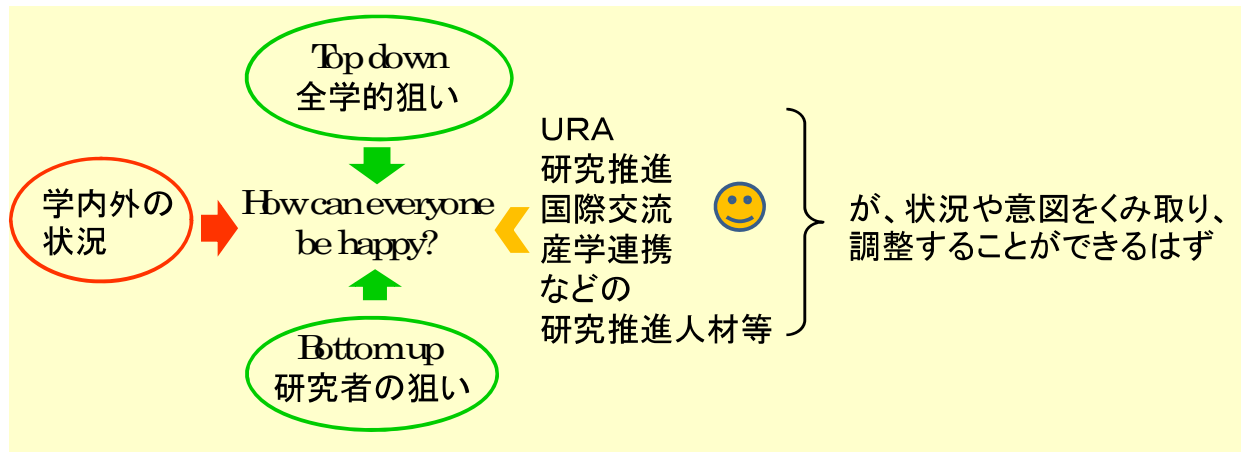
効果 外国人研究者が日本の競争的資金に挑戦しやすい環境に



学内組織との連携



おわりに



プログラムの改善をすすめながら継続
学内組織との更なる連携強化
新たな展開、海外の相手機関との協力 など



研究の更なる国際展開が期待できる大阪大学へ

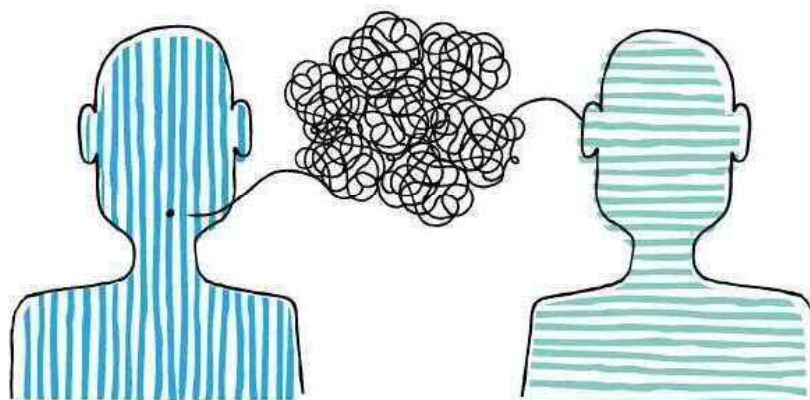
URA 整備事業成果報告(4)

研究広報とアウトリーチ 活動のための取組

シニア URA 岩崎 琢哉

研究広報とアウトリーチ活動のための取組

シニアURA 岩崎 琢哉



はじめに | 研究広報とアウトリーチ活動のための取組

アウトリーチ・チームが担当する業務を、URAの定着に向けた取り組みと、担当実務に分けて紹介します。

定着

実務

定着

- メールマガジンの発行
- RA研究会、URAシンポジウムへの企画への参加

【ダイレクト】 学内の関係組織、学外のURA整備事業関連法人などに向けて、大阪大学における「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」事業に対する取り組み情報などを、直接届ける。

【対話型】 メールマガジンで送信していることをふまえ、個人対個人の対話によるコミュニケーションを積極的に行う。



定着 > メールマガジンの発行

●大阪大学URAMメールマガジン

URAシステム整備のインフラとして2013年10月創刊、毎月1回発行。

研究推進、研究支援に関する話題をURAならではの視点で扱う。

配信先は学内外の約530名。

【内訳】

学内約300名(執行部、理事補佐、部局長、本部部課長、URA研究支援業務担当者等)
学外約230名(他大学URA、文科省・JSPS JSI関係者等)

ページ別訪問数は1号あたり平均618件

2013年10月17日～2015年2月26日。vol.1～16まで



定着 > RA研究会、URAシンポジウムへの企画参加

- 平成24年度 第2回URAシンポジウム(平成25年3月12日・13日開催)
- 平成25年度 第3回URAシンポジウム・第5回RA研究会(11月18日・19日開催)
- 平成26年度 第4回URAシンポジウム・第6回RA研究会合同大会(9月17日・18日開催)

ポスター発表

研究広報・アウトリーチ関連のセッションをオーガナイズ

※(RA研究会の準備委員としてもコミット)



実務

- アウトリーチ活動の普及のための指導
 - イベント実施を通じた事案
 - ウェブサイト等を通じた情報発信の事案
 - 講習会の実施
 - 独自企画の準備と新規協力先の開拓
- 部局URAとの情報交換・協力

【OJT形式】 研究者へのアウトリーチ実行にかかる支援は、その所属部局のスタッフと共同で行い、また基本的には(関係者同士の了解のもとで)スタッフへのOJTとして行う。

【人をふやす】 アウトリーチ支援の担い手・経験者を増やす。

【適切なサポート】 支援内容に定型を定めず、臨機応変に、必要とされるところを見極めて提供する。



実務 > アウトリーチ活動の普及のための指導(イベント)

イベント実施のプロセスを OJTとして活用する → 学内の担い手を増やす

アウトリーチ活動の実施にあたり、求めに応じて要件整理の段階からコミットする
オペレーションマニュアルを提供する(スタッフ用、研究者用)
研究者とサポートスタッフの橋渡し、各種のコーディネート

実際の案件はこちらをご覧ください

<http://www.ura.osaka-u.ac.jp/houkokukai/or/>

※ この取り組みには、URAの活動を学内外に伝える副次的な効果があった



実務 > アウトリーチ活動の普及のための指導(ウェブ)

ウェブサイト運営による情報発信を支援

ウェブサイトの新規設置・リニューアル案件に対するノウハウ提供
制作会社の選定、要件定義、ディレクションなど公開前の段階へのサポート
ソーシャルネットワークの併用など、公開後の段階へのサポート
多言語(日本語・英語など)展開へのサポート
取り扱い実績:平成24年度より学内 27サイト



実務 > アウトリーチ活動の普及のための指導（講習会）

アウトリーチ活動の企画運営に資する講習会の実施

広報に関する講習会

撮影に関する講習会

ソーシャルネットワークの利用に関する講習会



実務 > アウトリーチ活動の普及のための指導（新規開発）

独自企画の準備と新規の学外の協力先を開拓する

●二頁だけの読書会

人文・社会科学系研究の学術書を入り口とした対話プログラム。

2013年12月立ち上げ。これまでに4回開催（歴史学、人類学、臨床哲学×サステイナビリティ・サイエンス、演劇学）。

研究大学強化促進事業の一環。

りそな銀行CSR部門、大阪大学出版会と連携。

新たな客層に訴求。定員30名が毎回受付開始から2~3時間で満席に。

●「考える」を考える学校



実務 > 部局URAとの協力

- OJTを通しての情報交換
- 独自企画を通しての協力
- そのほかの例



- アウトリーチ活動の普及のための指導について
 - イベント実施 OJTの改善
 - 学外との共同企画などの展望
 - 情報発信 OJTの改善と今後
- 取り組みの発信と(学内)ネットワーキングについて
 - メールマガジン
 - ネットワーキングからのスピンアウト



●アウトリーチ活動への企画協力・オペレーション(実施)マニュアル提供など

サイエンスカフェ・オンザエッジ「なぜ、ワクチンは効くのか」(伊勢 渉 / 大阪大学免疫学フロンティア研究センター(WPI-IRRC)特任准教授)、サイエンスカフェ・オンザエッジ「ノーベル賞でたどる免疫学の歴史」(植松 / 東京大学医科学研究所国際粘膜ワクチン開発研究センター 特任教授)、研究ときめき*カフェ「“すべての”元素を超伝導に」(清水 / 大阪大学極限量子科学研究センター教授)、研究ときめき*カフェ「百聞は一見にしかず～細胞のなかで働くタンパク質の形をみる～」(栗栖 / 大阪大学タンパク質研究所教授)、サイエンスカフェ・オンザエッジ「いちばん新しい免疫の話」(黒崎知博 / 大阪大学免疫学フロンティア研究センター(WPI-IRRC)特任准教授)、生命科学図書館20周年記念企画サイエンスカフェ「この研究ができるまで～研究の誕生と成長のプロセス」(岡村康 / 大阪大学大学院医学系研究科教授、大阪大学大学院生命機能研究科教授)、カフェ・オンザエッジ・ネクスト「続・プリンターで、細胞を、生きたまま印刷する！」(松崎典弥 / 大阪大学大学院工学研究科 助教)、カフェ・オンザエッジ・ネクスト「最近時々聞く『トポロジカル絶縁体』って何？」(安藤陽一 / 大阪大学産業科学研究所教授)、カフェ・オンザエッジ・ネクスト「心臓—その働き者の秘密を探る」(高島成二 / 大阪大学大学院医学系研究科准教授)、研究ときめき*カフェ「マグネシウムと生命:がん研究から明らかになってきた意外なつながり」(三木裕明 / 大阪大学微生物病研究所教授)、カフェ・オンザエッジ・ネクスト「原子を狙ったところに配置する『自己組織化』技術とその研究最前線」(柳田剛 / 大阪大学産業科学研究所准教授)、大阪大学中之島サイエンスカフェ「物質が隠し持った機能の引き出しを開けるには」(福井賢一 / 大阪大学大学院基礎工学研究科教授)、大阪大学中之島サイエンスカフェ「もっと見たい!情報科学と生命科学からのアプローチ」(向川康博 / 大阪大学産業科学研究所准教授)、研究ときめき*カフェ「遺伝子/染色体が語るヒトの姿—出産/流産とガンの話」(篠原彰 / 大阪大学蛋白質研究所教授)、大阪大学中之島サイエンスカフェ「続・心臓—その働き者の秘密を探る」(高島成二 / 大阪大学大学院医学系研究科教授)



続き:

研究ときめき*カフェ「たった4文字“AIIC”の情報から何が分かるのか?～次世代遺伝情報解析の世界～」(中村昇太 / 大阪大学微生物病研究所助教)、大阪大学中之島サイエンスカフェ「高校生には分かるまい!物理学の最前線:トポロジカル絶縁体」(安藤陽一 / 大阪大学産業科学研究所教授)、研究ときめき*カフェ「新しい光、テラヘルツ波でみる世界～バイオ・セキュリティ・太陽電池～」(川山巖 / 大阪大学レーザーエネルギー学研究中心准教授)、研究ときめき*カフェ「"省く"を究める。データセンターにおける 省エネルギーの追求から学ぶ考え方のヒント。」(松岡茂登 / 大阪大学サイバーメディアセンター教授)、研究ときめき*カフェ「『1分子DNAシークエンシング』とはどんな技術なのか」(谷口正輝 / 大阪大学産業科学研究所教授)、研究ときめき*カフェ「見えない人の視覚をサポートする。私たちがものを見る仕組みと、人工視覚の研究について」(亀田成司 / 大阪大学臨床医工学融合研究教育センター特任准教授)、ナレッジキャピタルのカフェラボで、サイエンスカフェ「細胞を並べて積み重ねる話の、第三話。」(松崎 典弥 / 大阪大学大学院工学研究科助教)、ナレッジキャピタルのカフェラボで、サイエンスカフェ「毒と薬～ボツリヌス毒素が体内に侵入する仕組みの秘密から」(藤永由佳子 / 大阪大学微生物病研究所特任教授)、研究ときめき*カフェ「自分でもわからない、このジブン」(犬飼佳吾 / 大阪大学社会経済研究所講師)、研究ときめき*カフェ「仕事のモチベーション」(藤岡伸介 / 大阪大学レーザーエネルギー学研究中心准教授)、研究ときめき*カフェ「仕事を理想に近づける」(近藤勝義 / 大阪大学接合科学研究所教授)、研究ときめき*カフェ「チームワークって?」(保田英洋 / 大阪大学超高压電子顕微鏡センター長・教授)、研究ときめき*カフェ「アイデアのつくり方」(青井考 / 大阪大学核物理研究センター教授)、私の研究、今、ココです!「光の不思議にせまります。」(小川哲生 / 大阪大学大学院理学研究科教授)、私の研究、今、ココです!「生き方」「死に方」を考える。」(山中浩司 / 大阪大学大学院人間科学研究科教授)、私の研究、今、ココです!「誘惑と自制のあいだ。」(池田新介 / 大阪大学社会経済研究所教授)、私の研究、今、ココです!「飛鳥からの伝言、木簡を読む。」(市大樹 / 大阪大学大学院文学研究科准教授)、私の研究、今、ココです!「地震はなぜ起こる?」(廣野哲朗 / 大阪大学大学院理学研究科准教授)



URA 整備事業成果報告(5)

学内異分野ネットワーク 構築の取組

URA 福島 杏子

学内異分野ネットワーク構築の取組

URA 福島 杏子



背景

プロジェクト型の競争的資金が増えており、専門分野以外の知識が必要とされる。

「イノベーション創出に向けて、基礎となる科学的な成果を着実に生み出すことはもとより、近未来を見据えて社会実装し、あるべき社会に変えていくための大胆な連携や交流の仕組みが必要である。」

「我が国の中長期を展望した科学技術イノベーション政策について-ポスト第四期科学技術基本計画に向けて-」(中間とりまとめ)より抜粋

「国立大学改革プラン」等で「役員や経営協議会委員、学長選考の委員として学外者の経営参画を法定化し、法人の経営に参画」が求められている。

研究を行う上での基盤となる 学内ネットワークの構築

多様な背景を持つ大学の構成員同士が
議論をする場の構築

- ✓ 異分野交流会(アカデミックバール)
- ✓ シーズ・ニーズ創出強化支援事業
(イノベーション対話促進プログラム)
- ✓ 科学技術政策セミナー

「研究支援」にかかわる人々とのネット
ワーク構築

- ✓ 助成財団における助成プログラムリスト

科学技術政策セミナー

平成24年(2013年)3月から数ヶ月に一度開催
科学技術を下支えしている科学技術政策につい
て焦点をあて、大学の構成員を対象として開催



科学技術政策セミナー 実績(H25年度)

科学技術政策とはなにか

小林信一氏(筑波大学研究センター)

文献データを使った
「大学の評価」とその意味

調麻佐志氏(東京工業大学理工学研究科)

民間助成財団とはなにか、
研究者はどのように活用すればよいのか

渡辺元氏(助成財団センター)

EUの科学技術戦略と日欧連携

市岡利康氏(日欧産業協力センター)

科学技術基本法制定および科学技術基本計画について

吉澤剛氏(大阪大学医学系研究科)

科学技術政策の中で求められる大学の役割-若い教職員にむけて

有本建男氏(政策研究大学院大学/JSI研究開発戦略センター)

*肩書きは当時



4

科学技術政策セミナー 実績(H26年度)

今後の科学技術イノベーション政策の
方向性と「夢ビジョン2020」

齊藤卓也氏(文部科学省大臣官房政策課)

*各回の開催概要は本日の配布資料をご覧ください。

大学からみた科学技術政策

職員、文部科学省へ出向する: 花岡宏亮氏(大阪大学大型教育研究プロジェクト支援事務室)

科学技術庁(現 文部科学省)を経験して、研究の道に進む: 神里達博氏(大阪大学SCD)

研究者、経済産業省へ出向する: 北岡康夫氏(大阪大学工学研究科附属高度人材育成センター)

研究助成機関における戦略と大学における研究・実務とのつながり

我が国の科学技術をとらまく現状と研究開発戦略: 中山智弘氏(JSI企画運営室)

NEDOにおける技術開発マネジメントと技術戦略立案の試み: 白川展之氏

(NEDO産業技術総合開発機構技術戦略研究センター)

コメンテーター: 細野光章氏(東京工業大学研究戦略推進センター)

*肩書きは当時



5

科学技術政策セミナー 課題とこれから

【課題】

教職員への周知と参加者増に向けた仕組み

多様なバックグラウンドを持つ構成員同士が対等に意見交換をするための工夫



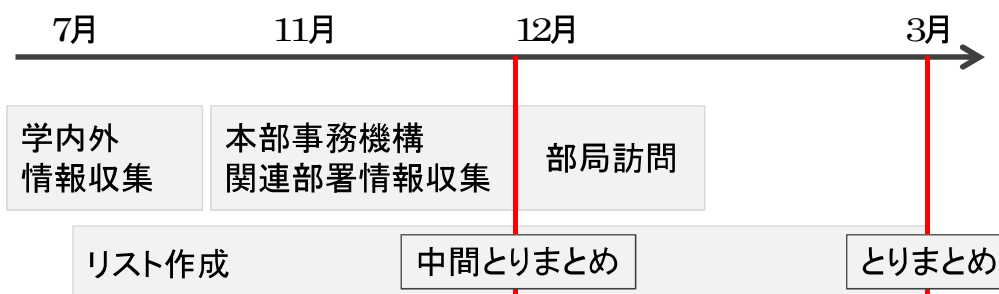
「学術政策セミナー:大学のこれからのを考える」と名称を変更し、事務系職員研修の一環とする。

学術や大学を取り巻く様々な状況について参加者と共に学び、大学の構成員が自身の業務や変革期における大学の役割について考える際の一助とする。

助成財団に関する 「助成プログラムリスト(人文・社会科学)」

学内で研究支援をしている人材(教員・事務系職員・URÅ等)とコミュニケーションを図り学内体制整備

【これまでの流れ】



助成財団に関する 「助成プログラムリスト(人文・社会科学)」 課題

【見えてきたこと】

部局(現場)が持つ一次情報に触れることが可能
部局内情報周知のための体制の比較が可能



本リストのメンテナンスの仕方
現場が必要とする情報とのすり合わせ

学内で周知される情報との整理

これからの予定

大阪大学内の異分野・異業種のネットワーク
の構築を目指す

部局にて研究支援・庶務・会計業務を行っている
事務系職員とのつながりを作り基盤整備を
目指す

URA 整備事業成果報告(6)

人文・社会科学系研究に関する取組

URA 川人 よし恵

人文・社会科学系研究に関する取組

URA 川人よし恵




本スライドの構成

はじめに（参考データ）

1. 研究活動の更なる活性化のための取組
2. 研究活動のプレゼンス向上のための取組
3. 研究活動の基盤を強化するための取組

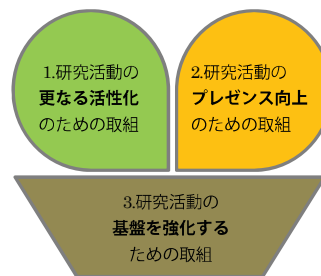
おわりに

 「人文・社会科学系研究に関するURA活動報告書 2012.06－2015.03」もご覧下さい。

はじめに

人文・社会科学系研究に関する取組の考え方

- “理系”に対する取組と大きな違いはない
- URAシステム整備事業・研究大学強化促進事業の連携で
- 取組を3つに分類、バランスと重点



2

(参考データ)

大阪大学は研究型総合大学

—3キャンパスに人社系15部局、教員620名*(全体の20%弱)

7/16 研究科

- 文学研究科
- 人間科学研究科
- 法学研究科
- 経済学研究科
- 言語文化研究科
- 国際公共政策研究科
- 高等司法研究科

(外国語学部には25言語専攻)

8/28 研究所・センター

- 社会経済研究所
- 国際教育交流センター
- 総合学術博物館
- コミュニケーションデザイン・センター
- 金融・保険教育研究センター
- グローバルコラボレーションセンター
- 日本語日本文化教育センター
- 知的財産センター



*=平成26年5月1日現在 ●=研究推進または支援に特化した部署または担当者あり

3

1. 研究活動の更なる活性化のための取組

1-1. 外部資金獲得支援

 人文・社会科学系研究に関連した競争的資金の学内説明会開催
および申請支援

- 民間助成に関する情報の整理と学内での提供
- 日本学術振興会特別研究員 申請支援*
- 科学研究費補助金申請支援*

1-2. 産学連携における人文・社会科学研究分野の参画支援

- シーズ・ニーズ創出強化支援事業(イノベーション対話促進プログラム)*

*=“理系”と共通の業務



4

1. 研究活動の更なる活性化のための取組

1-1. 外部資金獲得支援 **事例**

 人文・社会科学系研究に関連した競争的資金の学内説明会開催
および申請支援

説明会と個別支援
⇒ **1件採択**

公募情報に関するニーズ把握
⇒ **民間助成情報整理・提供**

- 2014年5月30日(金)午後(学内説明会)、6月～8月(申請書に対する助言)
- 12部局から24人の教職員の参加
- 日本学術振興会

「課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業
(領域開拓プログラム)」⇒ **1件採択**

- 科学技術振興機構 社会技術研究開発センター
「平成26年度戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発)」




5

1. 研究活動の更なる活性化のための取組

1-1. 外部資金獲得支援 **事例**

 人文・社会科学系研究に関連した競争的資金の学内説明会開催
および申請支援

 公募情報に関するニーズ把握
⇒ 民間助成情報整理・提供

紹介した公募情報の特徴

- トップダウン型・学際的・“応用”研究(社会的課題解決寄り)

ニーズとのギャップ
⇒ 新たな活動の種

説明会参加者の声=自分たちが求めているものと違った...

- 自分の研究をどのように関係付けたらいいのかわからない
- 国際共同研究をしたいので、予算規模が足りない
- 研究支援人材の人件費が出る研究費の公募情報を知りたい
- 民間助成も含め、分野別に年間の公募時期等を一覧にしてもらいたい



6

2. 研究活動のプレゼンス向上のための取組

2-1. 研究成果の国際的発信支援

- 英語論文投稿支援*
- 国際合同会議(シンポジウム)助成事業*

2-2. 広報・アウトリーチ活動支援

 「二頁だけの読書会」企画・運営

- 若手研究者ホームページ作成支援*

*=“理系”と共通の業務



7

2. 研究活動のプレゼンス向上のための取組

2-2. 広報・アウトリーチ活動支援 **事例**

🔍 「二頁だけの読書会」企画・運営

企業と連携した
研究者と学外の方との対話の場

参加者と「〇〇学」の出会い、
研究者自身の発見

- 学術書を入り口とするアウトリーチ
- 2013年12月立上げ、4回開催（歴史学、人類学、臨床哲学×サステナビリティ・サイエンス、演劇学）
- リソナ銀行・大阪大学出版会与連携
- 「二頁を選ぶ」というお題・デザインを楽しむ
- ゲストの専門分野に関する参加者の印象コメント



8

2. 研究活動のプレゼンス向上のための取組

2-2. 広報・アウトリーチ活動支援 **事例**

🔍 「二頁だけの読書会」企画・運営

参加者と「〇〇学」の出会い、
研究者自身の発見

強みの分析や
情報発信の種

質問・コメント、アンケート回答で、研究の社会的意義が言葉に

やはり「大阪大学＝理系」のイメージが強いが...

- 時代が変わると歴史が変わるとは、目が覚めた思いである。歴史は絶対的なものであり、その事実は変わらないと考えていた。
- 人類の知性に以前から関心がありましたが、特に、暗黙知と形式知を人類はどのように発展させたのか等、ナレッジマネジメントの視点からもおもしろいですね。
- 知ること、聞くことの必要性をしみじみと感じます。「対話する」前に他者に関心を持つこと、他者を受け入れることも合わせて。
- (演劇学とは) 時代と社会と人についての研究だと思いました。世の中の色々なことに対し、問題意識を持ち、自分の考えを持つことは大切なので、現在の私たちにも共通することだと、改めて思いました。



9

3. 研究活動の基盤を強化するための取組

3-1.調査・分析

- 大阪大学の部局・研究者の現状把握*
- 日本における人文・社会科学研究に関する学術政策動向
- 諸外国の学術政策や人文・社会科学系研究支援等に関する動向調査

3-2.講演・セミナー・研究会

- Horizons for Social Sciences and Humanities参加報告会
- 文学研究科ED講演会「人文・社会科学研究をめぐる最近の動向」
- CSCD全学ED研究会
- 大阪大学トランスプロフェッショナル・リテラシー科研 研究会「変動期の学術基盤を考えるーオランダ調査を手がかりにー

*=“理系”と共通の業務



10

3. 研究活動の基盤を強化するための取組

3-3.人文・社会科学系研究に関する意見収集・議論の場の創出

- 大阪大学の人文・社会科学系研究者を対象にした科研費に関するアンケート調査



第1回人文・社会科学系研究推進フォーラムの企画・運営

3-4.学内外ネットワークの構築

- 学内の関連部署または担当者との連携・協働
- 他大学URAとの連携・協働



11

3. 研究活動の基盤を強化するための取組

3-3.人文・社会科学系研究に関する議論の場の創出

🔍 第1回人文・社会科学系研究推進フォーラムの企画・運営 **事例**

—人文・社会科学系研究推進に必要な共通基盤整備を考えよう

🔍 立場・組織を超えた
対話の場＝研究推進の基盤

大学間ネットワークによる
URA活動の新たな展開

- 2014年12月22日(月)午後@阪大豊中キャンパス
- 大阪大学・筑波大学・京都大学のURAが企画・運営
- 研究者、URA、事務系職員等84名が参加(19大学等)
- 文部科学省審議会関係者の基調講演、
3分野研究者とURAからの話題提供、
グループディスカッション、全体討論



12

3. 研究活動の基盤を強化するための取組

3-3.人文・社会科学系研究に関する議論の場の創出

🔍 第1回人文・社会科学系研究推進フォーラムの企画・運営 **事例**

—人文・社会科学系研究推進に必要な共通基盤整備を考えよう

🔍 立場・組織を超えた
対話の場＝研究推進の基盤



EARMA2013年次大会での人文・社会科学系研究に関するセッション“ What future for the SSH in the European Research Area?”(2013年7月)



リトアニアで開催された ELI公式国際会議 Horizons for Social Sciences and Humanities (2013年9月)

現場と
意志決定の場を
つなぐ種



13



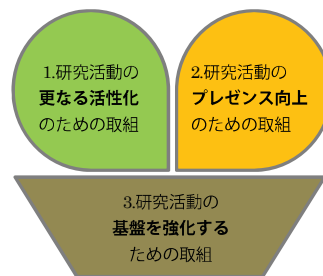
おわりに

- これまでの取組の継続
- 新たな展開...

ニーズとのギャップ
⇒新たな活動の種

強みの分析や
情報発信の種

現場と
意志決定の場を
つなぐ種



ご清聴ありがとうございました。

大阪大学 大型教育研究プロジェクト支援室
URAチーム 川人よし恵

kawahito@lserp.osaka-u.ac.jp



URA 整備事業成果報告(7)

URA のための URA による 副読本について

URA 高尾 正敏

文部科学省
「リサーチ・アドミニストレーター(URA)を育成・確保するシステムの整備」事業

URAのためのURAによる副読本

「エッセイ」と「ノウハウ」

第1集

URAメールマガジン連載 集成合本版

2014

<http://www.ura.osaka-u.ac.jp/>

大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室
リサーチ・アドミニストレーター
高尾 正敏



副読本について 冊子より転記

本冊子は、大阪大学URAチームが平成25(2013)年10月より毎月発行しているメールマガジンに不定期に連載したものを集成合本編集したものであります。大阪大学は、平成24年度に文部科学省「リサーチ・アドミニストレーター(URA)を育成・確保するシステムの整備」事業の実施機関に採択されました。実行組織として大型教育研究プロジェクト支援室のURAチームが、平成24年に発足し、大学内にURAシステムを展開普及することを目的として活動しています。文科省事業全体では、「URAのスキル標準」と「研修・教育プログラム」がそれぞれ、東京大学と早稲田大学で作成されて活用が開始されています。これらは、フォーマルなものでありますのでURA共通の標準テキストとして利活用されるべきものです。一方、本冊子は、インフォーマルな立場でURA活動を支援する目的で作成しました。構成は、筆者(高尾正敏)の、ほぼ四半世紀の研究企画推進業務経験を元に、エッセイ(URA ESSAY)とノウハウ・ブックレット(Know How Booklet)という形式になっています。「インフォーマル副読本」として活用していただくと幸いです。

副読本ですので、一見URA業務と関係なさそうな話題についての筆者の見解も混ざっていますが、元来日本ではURA業務内容についての定義がないので、敢えて筆者の独断と偏見で話題を設定しています。ことばを換えれば、何でもURA業務になるということです。特に、研究者支援が見えやすいプレ/ポストアワード以外に、アカデミア全体の研究戦略企画のほか経営企画に関する案件を扱うことが、国家政策からは期待されていることもあり、むしろそちらに重点を置いて高尾の私見をエッセイの形で示しています。プレ/ポストアワード関連に関してはノウハウ集として示しています。

読者としては、URAあるいはURA関連業務にされている方は勿論ですが、アカデミアの各層の経営幹部、企画担当、研究・教育支援担当の事務系の方、研究者・学生の皆様を想定しています。さらに、行政を担当されている方にも、研究支援現場感覚を掴んで頂くための参考になると思っています。つまり、どなたでもURAになった積もりで、気楽に副読本として眺めていただければと思っています。章立ては連載順のままにしています。どの月から読み始めて頂いても構いませんが、相互に関係して参照していますので、最終的には6ヶ月分全部を読んで頂くことが筆者からの願いです。様々なバックグラウンドをお持ちの読者を想定していますので、ベテランの方には冗長の部分もあると思いますし、逆に馴染みのない方には難解な部分もあると思いますが、その辺りは適当に端折ってお読み頂ければと思っています。

平成26年11月
大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室
リサーチ・アドミニストレーター
高尾 正敏

CONTENTS of Side Reader

集成合本版について

2月号 URA ESSAY

大学に於ける研究活動と大学院教育
—URAと研究大学—

5月号 URA Know How Booklet

「個人研究とチーム研究」
—URAと競争的資金—

6月号 URA Know How Booklet

「オープン化・拠点とURA」
—教育・研究・先端設備共用—

7月号 URA ESSAY

「開運！かねの草鞋を履いた鑑定団
— 一流の目利き、二流の目利き と URA —



URA ESSAY

URA
Know How booklet

2

CONTENTS (2)

9月号 URA ESSAY

「シュンペーターの創造的破壊と組織改革」
— 自発的対称性の破れと物理帝国主義 —

10月号 URA ESSAY

「先端技術開発と錢探技術開発」
技術移転のダイナミクスと揺らぎ効果
— ステージゲートと 左手の法則 —

計画中のCONTENTS

URA ESSAY として

「大学の知の創造、蓄積と活用」 —大学発イノベーションのあり方—
「大学経営におけるマーケティング手法活用の可能性」 —大学の競争優位—
「企画職としてのURA」 —自立と危機管理—
「ガバナンス、コンプライアンス と 教育・研究マネジメント」
「ディシプリンと大学の教育研究について」、何を学ぶか、何を教えるか？



3

副読本を書き始めた動機(1)

- 大学は 研究開発マネジメント手法が企業に比べ**20年**遅れている
- 産業界では、技術**導入**から、**オリジナリティ追求**へ
四半世紀前、欧米の真似からの苦勞して脱却
基礎研究ただ乗り論、(基礎研、中研ブーム)
基礎から応用まで一貫、 国家研究開発大型プロジェクト開始
- 親方日の丸、**護送船団方式**
国立大学が文部省の一部局時代 自ら考えることは不可？ 上意下達！
高度成長時代に合った人材育成・教育が主、研究活動は限られた大学で
- 護送船団方式の**終焉**：国立大学法人化
法人としてのあるべき姿の模索
- 自ら考え(施策企画)し、自ら行動し、自ら評価する (**PDCA**)
産業界からの圧力：時代にあったマネジメントを！
URAシステムもその一環として捉えるべき
- アカデミアでも学術領域・コンセプトの**輸入**から**オリジナル**へ
研究テーマ企画、マネジメントも 同じく
- オリジナル研究、オリジナルマネジメントでなければ法人が潰れる
イノベーションへの期待と、途上国の追い上げ、BRICS……
- バブル崩壊後の失われた20年からの脱出
経済活性化のためのアカデミアへの圧力
一方 研究活動バブル、便乗悪乗り、投資に対する効果
(先生たちはそうは思っていないが 企業はそう思っている)

失われた20年からリバイバルするには

4



副読本を書き始めた動機(2)

URAシステム

URAシステム立ち上げ以前・システム設計

システムの理念・コンセプト議論大いに結構

- 100点満点のシステムは存在しない
満点を目指す、永遠に議論が続く
大切であるが、理念では仕事は出来ない
- そこそこ 意見集約できて、立ち上がったら、
システム設計の自己評価60点であれば、まず行動
実務をすれば、良いところ、悪いところが見えてくる
PDCAを回す仕組みを最初から組み込んでおく
走りながら考える

実務家集団としてのURAシステム

- システムの研究をするのか、実務をするのか？
勿論、URAは実務をする職
URAは地べたを這ってなんぼ、

行動方法がわからないのなら 先輩に聞け

5



副読本を書き始めた動機(3) URAのお客様は誰か？

- **顧客第1主義の徹底:**
お客様は研究者である
一方、産学連携のお客様は 学外企業等
産学連携コーディネーターとURAは お客が異なる
→ マネージメントが違って当然
- **アメリカ型のURA**
外部資金マネージメントの実務
申請書の用意、獲得後の資金管理
業務と報酬が紐付されているので、資格階級等でサポート可能
担当業務Job Description が契約書に記載
記載事項: 責任範囲と給料連動
- **日本型のURA** (企業の企画業務に近い: 総合職)
当初の議論ではアメリカ型を目指した
最初のCSTP等の議論では、研究者教員の負担を減らすということで
アメリカ型が求められたが……

まず足元を見よう 舶来主義との決別



6

日本型のURA 企業の企画職に近い部分もある: 総合職

- 大学には経営に直結する企画部門がない 産業界は困惑
日本的な項目が付け加わった : 要するに何でも屋、よろず屋
- 研究テーマ企画等のマネージメント
 - コーポレートガバナンス
 - アウトリーチ (広報、宣伝)
 - コーポレート/ディビジョン戦略・戦術立案・推進
 - 経営データ収集解析(IR)
 - 職務を細かく決められない……

- 実務: 定まったURAシステムの中で実務をする
経営システムを研究するのではない
優先順位 実務を第1に、研究は第2以下、
- 企画業務は、経営システムを確定すること(60点でも兎に角動く)
- 実務は、実務家に任ずという割り切りが必要。
- 実務では小田原評定にならないように、時間軸を常に意識
- 研究としてのケーススタディは一般解にならない 常に特別解
- 一般化しないと、役に立たない
一般解を得るのが難しいのなら、やってみるしかない



7

輸入でないURAシステムを 目指すは日本オリジナル

- アメリカからの輸入でない日本の事情に合致したURAシステム設計と実行
頭の良い人は、直ぐに輸入したがる!! (舶来主義)
学んで、日本の事情に合えば採用すればよい
日本の事情に合わないから、日本はダメだという論陣を張らない
日本は頭が悪いという前提でURAシステム設計すればよい
カッコよさは不要
それが 地べたを這うことの意味
- そうは言っても、国際ハーモナイゼーションのため、共通のところは採用

迷惑がられてても、高尾流を貫く!!
四半世紀やってきて、齟齬はない

高尾流が気に入らなければ、
それぞれ独自流をやればよい!!
総合職というのは、そういうもの

URA(企画職としての)人材養成と育成 総合職、企画推進的業務

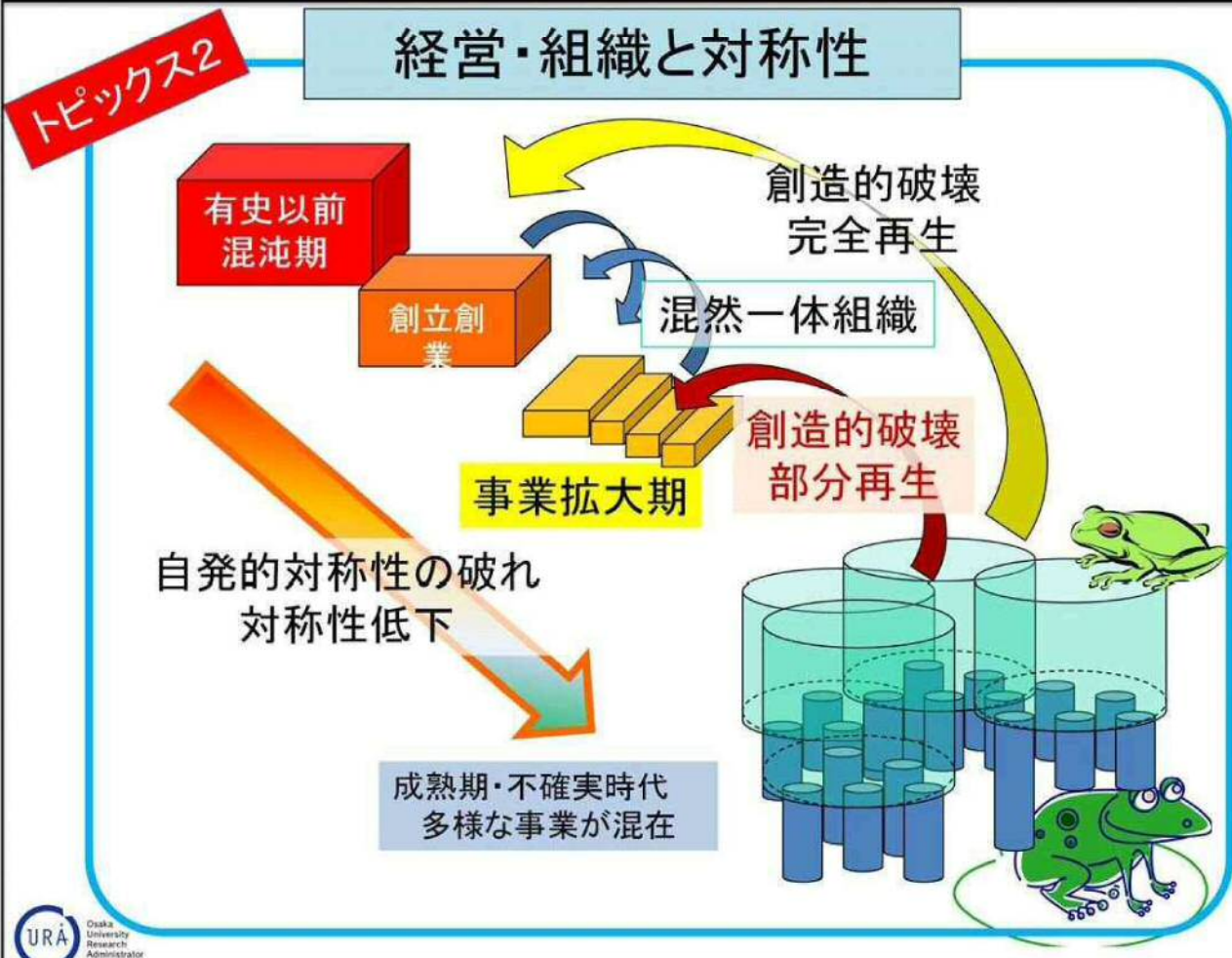
- 多岐にわたっているので、業務を規定するのが難しい
システムティックな人材養成はできない
OJT が中心 (企業でも企画担当の人材養成はシステムティックにできない)
最終的には、非常に個人の感性に依存する
できる人と できない人に分かれる
その感性がある人のみ、企画が担当できる (個人依存) 遍く育成できない
- 教育と研究の攻めぎあい ➡ 明治以来の懸案で現在も片付いていない
研究だけでなく、教育システムについても見識が必要 (2月号)
エリート教育時代: 師の背中を見て育つ(勝手に育つ)
高等教育の大衆化(マスからユニバーサルへ)
マーケティングで言う プッシュからプルへ
セグメンテーション (勝手に育つ、背中を押す、十分ケアする ……)
- 研究と教育が一体化できるのはどのような場面か (高尾の見方)
勝手に育ってくれる層と、背中を押したら育ってくれる層の一部

トピックス(1) 研究目利きと事業化目利き

「開運！かねの草鞋を履いた鑑定団」 (7月号)
— 一流の目利き、二流の目利き と URA —

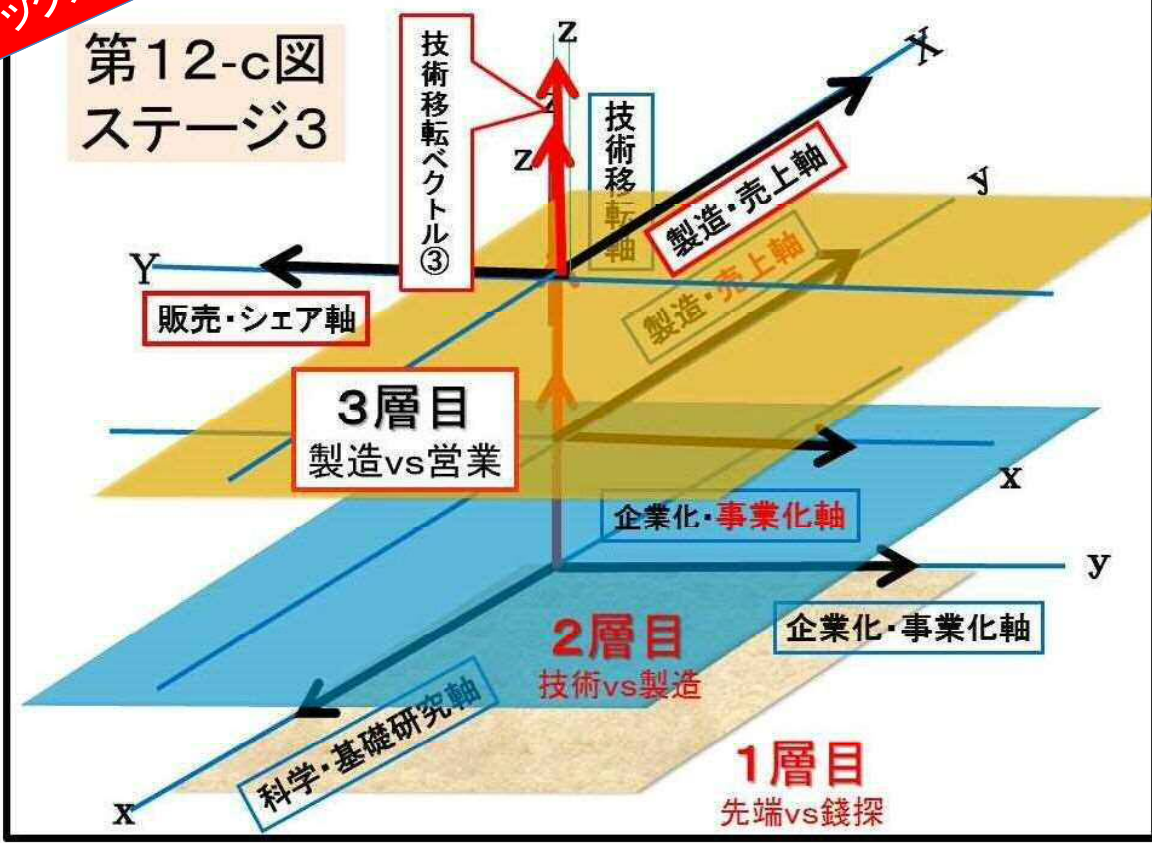
- ◆ 産学連携との関係
 - 「研究目利き」と「事業化目利き」はちがう
 - 産学連携に目利きは不要
 - 放っておいても(目利きはいなくても)、いずれ分かる。時間が解決する
 - きちんと情報を流す仕掛けがあれば、産側が判断する
 - 判断基準は、産の分野、企業毎で異なる
 - 学側の判断基準は通用しない
 - 基準の押し売りは禁物
- ◆ 研究目利きは、人材発掘が主、テーマ発掘ではない
 - 人に研究テーマがつく 基礎研究 ゴールが見えなくても人に賭ける

- 人に研究テーマが付く 基礎研究
- 開発テーマに人が付く 落としどころが明確



トピックス3

第12-c図
ステージ3



その他の話題

()内はメルマガ2014年度出現月号

- 大学に於ける研究活動と大学院教育
—URAと研究大学— (2月号)
- 個人研究とチーム研究 (5月号)
競争的研究資金の活用
 - チーム研究(規模によらず、プロジェクト研究)を起案から、結果までマネージ
 - 個人研究の中身にURAが関与することは無理
- 拠点運営とオープン化 (6月号)
国家プロでは、研究リソースは糾合する
- 目利きとして、「ひと」を探して、盛り立てることに徹する (7月号) **トピックス1**
- 組織改革と自発的対称性の破れと回復 (9月号) **トピックス2**
相変化光ディスク材料からの発想
⇒ マネージメント改革
- 技術移転と左手の法則 (10月号) **トピックス3**
物理帝国主義からの発想



URA 整備事業成果報告(8)

URA 職の定着に向けた取組

URA・統括マネージャー

池田 雅夫

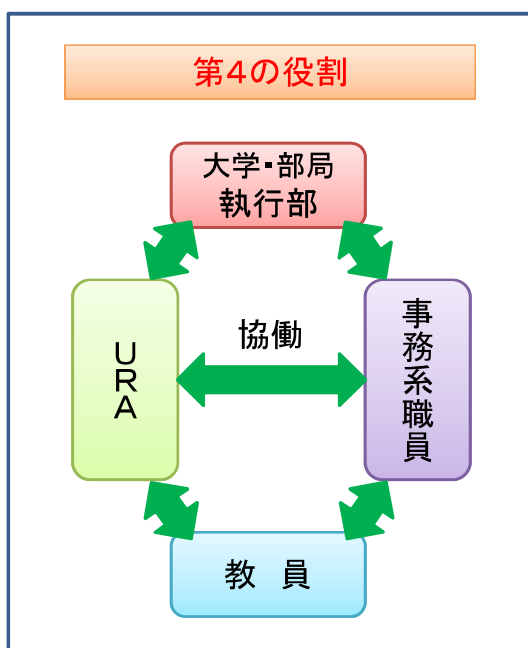
URA職の定着に向けた取組

URA・統括マネージャー 池田 雅夫



大阪大学におけるURAの位置付け(1)

◆ URAは教員と大学本部・部局執行部をつなぐ
◆ URAは事務系職員と協働して、執行部の企画を支え、
実行する



URAをどう活用するかは
大学の競争力の1つのポイント

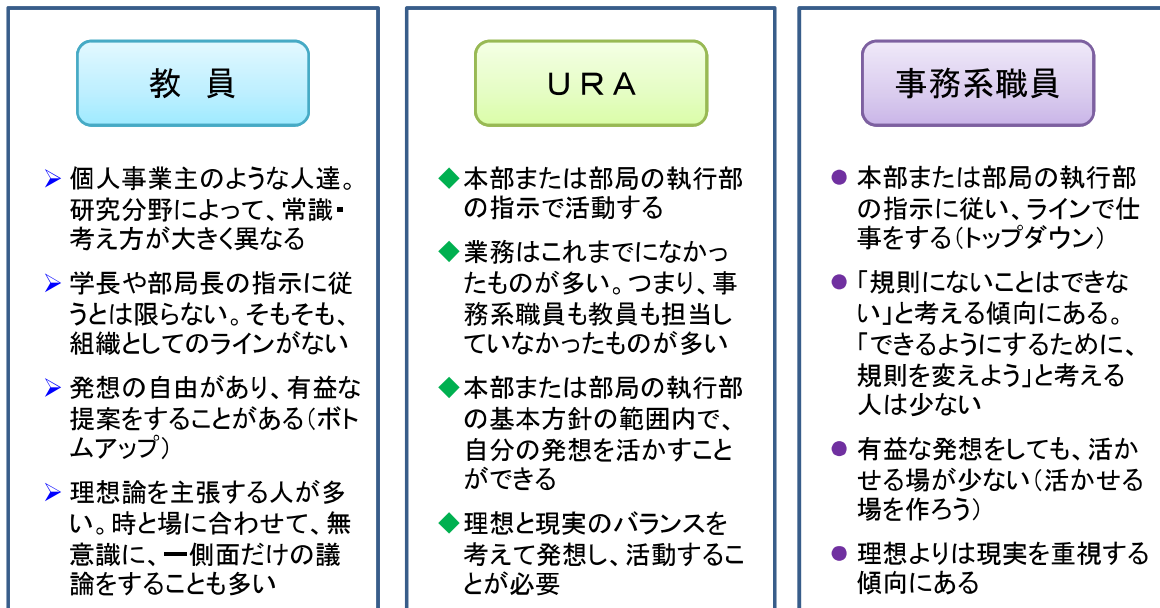
- ▶ URA組織に課すミッション
外部資金獲得か、戦略企画支援か
対象は研究だけか、教育も含めるか
- ▶ URA組織の規模と位置付け
本部と部局のURA組織の関係
事務組織との関係
- ▶ 優秀なURAの採用と育成と定着
ポスト、処遇、キャリアパス

マネジメント改革に活用するのか
便利屋として活用するのか

大阪大学におけるURAの位置付け(2)

URAと教員と事務系職員の違い

(URAの視点から)



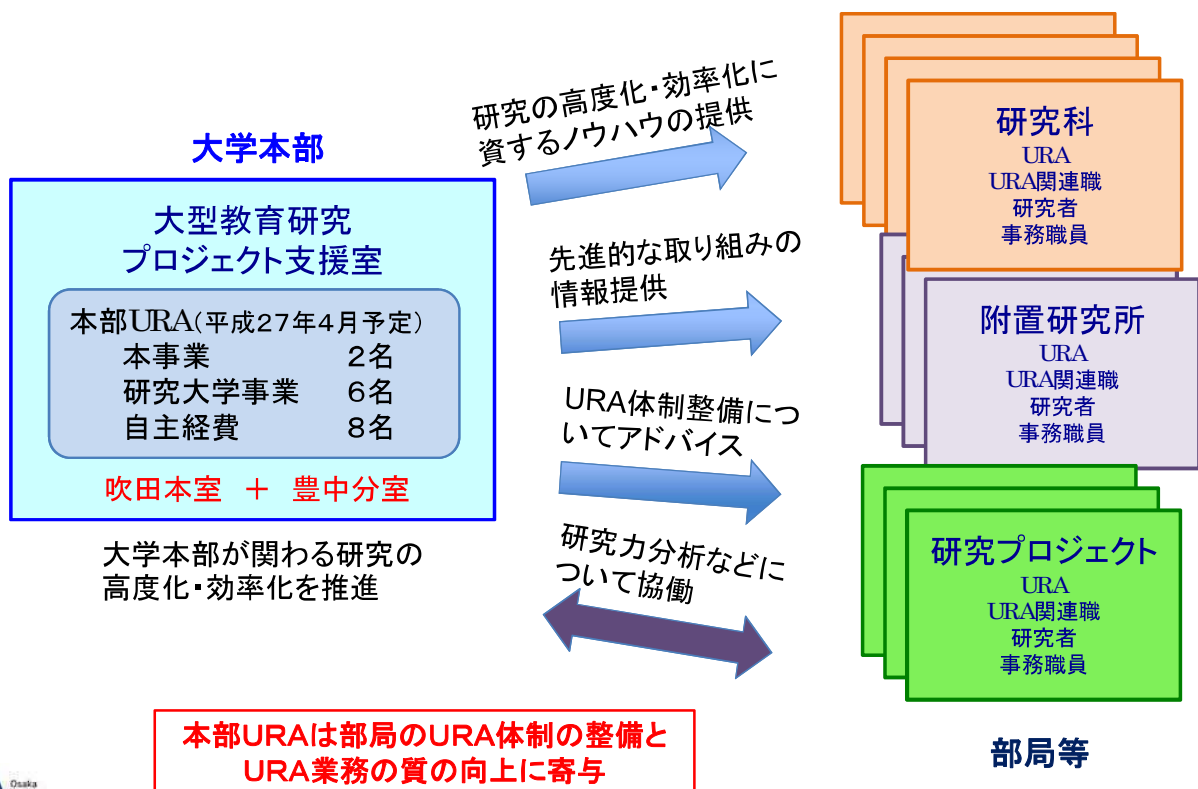
大阪大学のURA

採用方法：教員に近い、勤務形態：教員と事務系職員の間、執行部との関係：事務系職員に近い



大阪大学における本部URAと部局URAの関係(1)

大型教育研究プロジェクト支援室は大阪大学全体のURA体制の中心



大阪大学における本部URAと部局URAの関係(2)

部局のURAは部局の独自経費で雇用されているため、活動には独自性が存在し、本部の直接のラインには入らない。

したがって、共通の課題について、共同行動を増やすことで、一体化を推進するのが適切な方法

共通課題の例：人文・社会科学系研究者の支援、URAのスキルアップ、研究力評価等

共同行動の例：研究支援シンポジウム、科学技術政策セミナー(多数の部局)
本部URA隔週ミーティングや海外調査への参加(法学研究科、国際公共政策研究科、工学研究科)

今後の展望：URA(類似職)を配置し、執行部がその必要性をよく理解している部局との連携を深める。

まだURAを配置していないが、執行部が必要性をよく理解している部局に導入を勧める。



大阪大学におけるURA職の制度(1)

URAの呼称(職階)

URA(総称)					
シニア・リサーチ・マネージャー	教授相当		研究戦略推進支援	研究戦略推進支援	
リサーチ・マネージャー	准教授相当		プロジェクトの支援	プロジェクトの支援	
チーフ・リサーチ・アドミニストレーター	講師相当		研究費の獲得支援	研究費の獲得支援	
リサーチ・アドミニストレーター	助教相当				

RU11の海外調査によると、各国では以下の使用が主である。

米国：リサーチ・アドミニストレーター(プロジェクト管理等ポスト・アワードが主)

欧州：リサーチ・マネージャーとリサーチ・アドミニストレーター

豪州：リサーチ・マネージャー(研究戦略推進支援の割合が大きい)

東京大学の調査によると、日本の大学関係者は、プロジェクト管理よりも研究戦略推進支援に期待している。大阪大学でも同様であるので、上級のURAはリサーチ・マネージャーと呼ぶほうが相応しいと判断



大阪大学におけるURA職の制度(2)

期間の定めのない評価連動型年俸制(定年65歳)の**新たな職種**を導入

基本給部分 (基本年俸額)	賞与部分 (業績変動賞与)
------------------	------------------

学術政策研究員

裁量労働制適用

賞与の位置付けは月給制と同じ ⇒ 賞与額は6月と12月の支給時期に評価に基づき決定

2015年3月まで

職種の名称	呼称	経費
特任教授	URA	文部科学省 URA事業費
特任教授	URA	
特任教授	URA	
特任研究員	シニアURA	
特任研究員	シニアURA	
特任講師	URA	
特任研究員	URA	
特任研究員	URA	

2015年4月以降(予定)

職種の名称	呼称	経費
特任教授	シニアRM	文部科学省 URA事業費
特任教授	シニアRM	
特任教授	シニアRM	自主経費
学術政策研究員	シニアRM	
学術政策研究員	RM	テニュア トラックの 位置付け (任期制)
特任講師	チーフURA	
特任研究員	チーフURA	
特任研究員	チーフURA	

URA : リサーチ・アドミニストレーター

RM : リサーチ・マネージャー



6

大阪大学におけるURA職の制度(3)

URAに対する評価項目

		評価項目
実績 評価	仕事の成果	期待された仕事の成果をあげているか
	人材(部下)育成	人材(部下)育成に努めているか
	創意工夫・業務改善	創意工夫・業務改善に努めているか
	正確性	業務遂行にあたり正確性が認められるか
	迅速性(スピード感)	業務遂行にあたり迅速性(スピード感)が認められるか
能力 評価	業務の進行管理	業務の進行管理に努めているか
	知識・技能	専門知識・技能等を有し、それを発揮しているか
	企画力	企画力を有し、それを発揮しているか
	情報収集力・活用力	情報収集力・活用力を有し、それを発揮しているか
	意志決定力	的確な意思決定力を有し、それを発揮しているか
	理解力・判断力	的確な理解力・判断力を有し、それを発揮しているか
	注意力・安全観念・リスク 対応力	注意力・安全観念・リスク対応力を有し、それを発揮しているか
	組織運営力	組織運営力を有し、それを発揮しているか
取組 姿勢 評価	リーダーシップ	リーダーシップを有し、それを発揮しているか
	折衝力・調整力	折衝力・調整力を有し、それを発揮しているか
	責任感(自立性)	責任感(自立性)を持って取り組んでいるか
	積極性	積極的に取り組んでいるか
	協調性(チームワーク)	協調性(チームワーク)を持って取り組んでいるか
	規律性	規律性のある行動をとっているか
	チャレンジ性	チャレンジ性のある行動をとっているか

具体的内容には東京大学作成のスキル標準を活用

昇任は、経験や業績に応じて審査
事務系職員に対する方法と同様

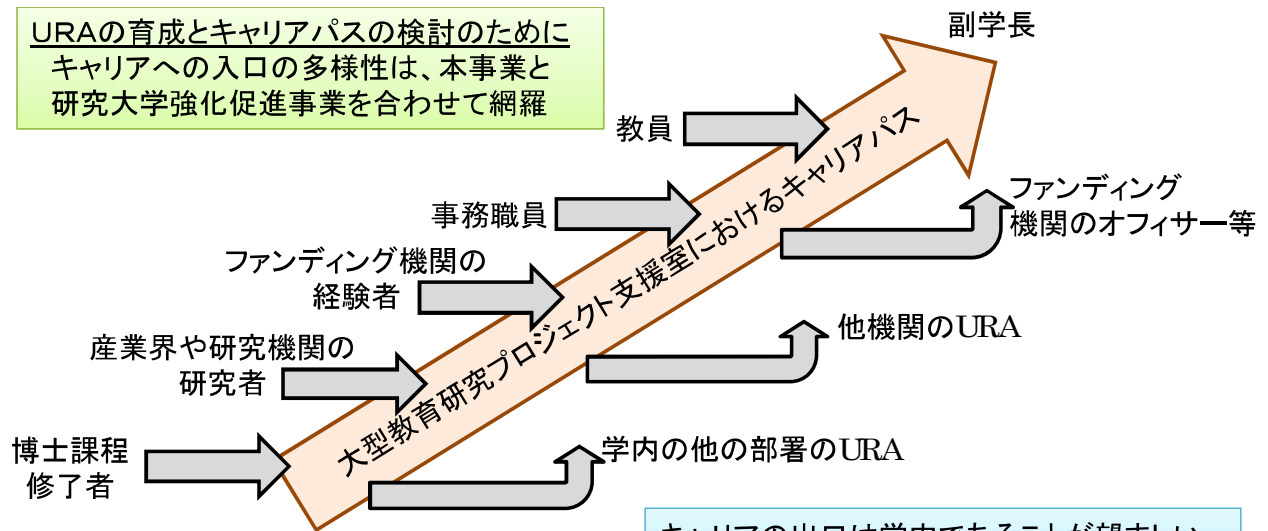


7

大阪大学におけるURA職の制度(4)

大型教育研究プロジェクト支援室を中心としたURAのキャリアパス

URAの育成とキャリアパスの検討のために
キャリアへの入口の多様性は、本事業と
研究大学強化促進事業を合わせて網羅



キャリアの出口は学内であることが望ましい
URAは高度なマネジメント情報に接する
機会が多いため、学内に留まってほしい

大阪大学におけるURA職の制度(5)

採用に関する考え方

**やいがいのある仕事です。感謝してもらえます。仕事です。
面白い仕事です。**

URA人材の候補は

柔軟な考えの持ち主で、妥協ができる人(理想は理想、現実は現実という割り切り)
異なる専門分野の人の話を聞くことができる人
制度について、理解力と説明力に優れている人
いろいろなことに興味をもち、情報収集が得意な人
研究者の立場と社会(大学、国、国民等)の論理の両方が理解できる人
自分が主役でなくても構わないと考えることができる人
鍛えれば、精神的にタフになりそうな人

URAになってから

制約内で実施可能な多様なアイデアを生み出すことができる人
新たな発想ができる人

大阪大学におけるURA制度整備事業の今後の予定

① 目標

- ◆ URAの有用性を更に示し、自主財源による本部URA体制の基盤強化に努める。
- ◆ 部局URAとの連携の下、大阪大学全体のURA業務の質の向上と分野の拡大に努める。
- ◆ 日本全体のURAシステムの定着と高度化に貢献する。

② 事業内容

- 研究推進や国際産学連携の活動等において事務組織との協働を進め、URAの有用性を示す。
- 部局執行部にURAの有用性を示すために、FDやSD活動に協力する。
- 部局URAとの共同活動を増やし、部局のURA活動の拡大に協力する。
- URAの団体であるRA協議会の活動やRU11のURA委員会に参加し、日本のURAコミュニティの形成と充実に協力する。
- 日本のURAシステムのモデルの一つとして、メールマガジンの発信やセミナーの開催、インターンの受入れ等により、学外への情報提供に努める。



10

付 録 (URAの極意)

参 考

研究の極意：内なる常識を捨てること

池田雅夫：「研究の極意」, 生産と技術, 第66巻, 第4号, pp.2-5, 2014年
<http://www6.ocn.ne.jp/~seisan/664/664-02.pdf>



URAの極意：内なる常識に縛られないこと

内とは、URA個人、URA組織、部局、大学、学界、日本、…

これができる人がURAに向いている
見聞を広めることで、そうなることができる



11

大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室の歩み

- 平成21年7月 本学が全学的かつ重点的に推進する大型教育研究プロジェクト及び産学連携事業の強化プロジェクトに係る支援体制の整備及び企画戦略機能の強化を図ることを目的として、総長の下に、大型教育研究プロジェクト支援室を新設
- 平成21年度補正予算による文部科学省「教育研究高度化のための支援体制整備事業」の「世界的拠点構築のための高度人材育成支援事業」の実施機関に採択され、本支援室からグローバル COE プログラム、組織的な大学院教育改革推進プログラム等のプロジェクトに研究支援者(研究員、技術職員、事務職員等)を派遣し、大型教育研究プロジェクトの支援を実施
- 平成22年4月 本支援室に専任の統括マネージャー(特任教授)を配置
- 本支援室の事務業務を担う部署として、研究推進部に大型教育研究プロジェクト支援事務室を新たに設置し、教職協働によるリサーチ・アドミニストレーション活動を開始
- 新規の競争的資金獲得のための企画・調査・支援を行うとともに、内閣府「最先端研究開発支援プログラム」採択課題の専任の支援チームを設置し、ポストアワード業務を実施
- 平成23年5月 本支援室に統括マネージャー補佐(当時、講師 平成24年4月から准教授)を配置
- 平成24年6月 文部科学省「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」(リサーチ・アドミニストレーションシステムの整備)事業の実施機関(世界的研究拠点整備)として採択〔実施期間: 平成24年6月～平成27年3月〕
- 本支援室に URA チームを設置し、順次、URA(合計8名)を採用
- 平成25年8月 文部科学省「研究大学強化促進事業」の事業実施機関に採択〔支援期間: 平成25年8月～平成35年3月〕
- 以降、この事業による URA(合計5名)を順次採用し、本支援室に配置
- 本支援室 統括マネージャーが総長の指名により副学長に就任
- 大阪大学 URA シンポジウムを開催 (於:大阪大学銀杏会館)
- 平成26年4月 文部科学省「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」(リサーチ・アドミニストレーションシステムの整備)事業に係る事業進捗状況評価ヒアリングの実施

- 平成26年6月 文部科学省「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」(リサーチ・アドミニストレーションシステムの整備)事業に係る事業進捗状況評価結果の通知・公表 (本学の評価結果は、下記参照)
- 平成27年2月 文部科学省「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」(リサーチ・アドミニストレーションシステムの整備)事業の継続実施機関として内定
〔実施期間: 平成27年度～平成28年度〕
- 平成27年3月 大阪大学リサーチ・アドミニストレーター(URA)整備事業報告会を東京・大阪にて開催
(於: 虎ノ門ツインビルディング 及び 千里ライフサイエンスセンター)

文部科学省「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」
(リサーチ・アドミニストレーションシステムの整備)事業に係る事業進捗状況評価結果
(平成26年6月9日)

大阪大学における評価結果及びコメント (コメントは、文部科学省ホームページより転載)

評価結果: A+

事業全体として順調に進展しており、他機関の参考となる先進的取組が進展しているなど優れた進捗状況と判断する

(評価コメント)

多様性を持った URA 人材を育成、配置し、情報収集、各種分析、具体支援等の業務を遂行させるとともに、URAの判断に基づく企画も一定程度行われ、URAの必要性に関する学内の意識改革につなげるなど、URA人材の能力を発揮させるマネジメントも適切に機能しており、世界的研究拠点整備やURAシステムの定着に向けた活動が展開されており高く評価できる。

また、URA が所属する「大型教育研究プロジェクト支援室」と関連する部門である「研究推進部」及び「産学連携本部」との機能・役割分担を明確にし、独立的に運営することにより研究推進・支援の実効性を担保しようとすることは大規模大学での URA システムの組織運営の一つのモデルになり得るものと期待される。

他方、大学本部の URA と部局の URA との関係、URA の昇任と評価の制度設計については、一層の整備を期待したい。

引き続き、日本の URA システムの先導的モデルとしての本制度の普及・発展に向けた取組が進められることを期待する。

大阪大学リサーチ・アドミニストレーター(URA)整備事業報告会 資料集

平成27年3月

本報告会は、文部科学省「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」
(リサーチ・アドミニストレーションシステムの整備)事業として開催しています。

平成27年3月発行

編集・発行

国立大学法人 大阪大学
大型教育研究プロジェクト支援室
研究推進部 大型教育研究プロジェクト支援事務室
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2番1号
大阪大学 産連本部B棟2階

問い合わせ先

〔報告会事務局〕

Tel: 06-6879-4786 Fax: 06-6879-4308
E-mail: ura_hokokukai@lserp.office.osaka-u.ac.jp

〔URA チーム〕

Tel: 06-6879-4817 Fax: 06-6879-4308
E-mail: info-ura@lserp.osaka-u.ac.jp

ホームページ

<http://www.ura.osaka-u.ac.jp/>



大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1 産連本部B棟(2階)
TEL.06-6879-4817 info-ura@lserp.osaka-u.ac.jp